《令和七年度暗唱⑧》

『徒然草』より

つれづれなるままに

吉田兼好

つれづれなるままに、
日くらし　硯にむかひて、
心にうつりゆく　よしなし事を、
そこはかとなく　書きつくれば、
あやしうこそ
ものぐるほしけれ。

《現代語訳》

やることもなく手持ちぶさたに、一日中硯に向かって、心に浮かんでは消えるとりとめもないことを、あてもなく書いていると、思ったより熱中して異常なほど狂おしい気持ちになるものだ